

角井厚吉の画歴—京都府画学校と不同舎時代を起点に

石井香絵

序

早稲田大学會津八一記念博物館が所蔵する油彩作品《早川秋の夕》(図1)は、明治大正期に活動した洋画家^つ角井厚吉が描いた風景画である。本作については前号掲載論文「玉井貴子・小林夢実「洋画家・角井厚吉と《早川秋の夕》について」」に角井の来歴と他作品を含む調査結果がまとめられ、生没年をはじめ詳細が不明であるこの画家に関する考察が試みられた。当館の令和3(2021)年の企画展示「はじまりの渡欧画家・川村清雄と近代洋画の挑戦者たち」においても本作は博物館所蔵の初期洋画作品として出品されている。また本作は平成15(2003)年から翌年にかけて修復研究所²¹にて修復されているが、博物館が所蔵する修復報告書を閲覧したところ修復前は全体的に色がくすんでおり、しみや剥落もあり状態は良くなかったことが分かる。

角井厚吉《早川秋の夕》は會津八一記念博物館が開館する平成10(1998)年より以前に早稲田大学に寄贈された作品である。本作は早稲田大学中央図書館特別資料室にある「貴重品登録カード」の記録によれば、昭和42(1967)年頃に大学の庶務課から旧図書館(現會津博が入る2号館)の特別資料室に移管されており、大学の所蔵となったのは50年以上前であることが分かる。なお作品タイトル《早川秋の夕》の由来は不明であるが、少なくとも旧図書館に移管された昭和42年頃の時点で既にこのタイトルは付されていた。しかし寄贈者や寄贈の経緯、受入年および当時の学内の具体的な受入れ先は不明で、作品自体も制作年や出品歴などの関連情報が無く、本人同様に知れるところは少ない。

角井厚吉について判明しているのは主に画学生時代および図画教員時代の履歴である。角井は明治21(1888)年に京都府画学校西宗を卒業し図画教師として和歌山中学に赴任後、23(1890)年に辞職して上京し、小山正太郎の洋画塾不同舎に入門している。以後は東京で作画活動を続けたが、これまで紹介された作品は僅かである。現存作が少なく経歴の多くが不詳であり、画家としてほとんど注目されてこなかったのが現状である。現在は角井の数少ない現存作例のうち、船津静作の依頼で大正2(1913)年から8(1919)年にかけて制作した桜を描いた57枚の水彩画『江北桜譜』が代表作として挙げられるだろう。近代洋画史の観点でいえば、角井は京都府画学校西宗と不同舎がそれぞれ最も盛んであった時代に身を置いた人物であり、初期の西洋画法の習得・実践者といえる。また同時代に活躍した洋画家たちとの交流の様子も見受けられる。さらに今回の調査では、新たに角井の多様な作画活動が明らかとなった。本稿は前号の玉井・小林論文に続き角井厚吉の経歴および《早川秋の夕》をはじめ作品に関する調査を行い、改めてその画業を考察する。

京都府画学校西宗在学時代

角井の判明している経歴で最初に確認できるのが京都府画学校西宗に在籍した記録である。京都府画学校は明治13(1880)年7月に御苑内の旧准后里御殿を仮校舎として開校した、工部美術学校に次ぐ草創期の美術学校である。



図1 角井厚吉《早川秋の夕》、油彩・キャンバス、49.9×70.8cm、早稲田大学會津八一記念博物館蔵

教科は東宗、西宗、南宗、北宗の4科で、西宗が西洋画科にあたる。当時京都の洋画家は田村宗立のみと言って良い状況にあったが、全国に先駆けて近代化政策を推進していた京都では西洋画への関心は少なくなかったと思われ、西宗の設置に至っている。画学校には開校時より出仕という制度が置かれ、府から出仕に任命された者の中から各宗の担当教員が選出された。出仕には学内の展覧会に出品するなどの協力義務があったが、基本的には学外者の立場であり、教育活動にあたったのは選出された教員であった^(註1)。開校時西宗には田村宗立と前年に京都移住した小山三造、写真師の舟田有徳が出仕に任命されており、小山が教員に選出された。しかし小山が翌明治14（1881）年11月に辞職したことで宗立がその後任となり、明治22（1889）年10月まで宗立の西宗教員時代が続いた^(註2)。

角井が在籍したのは宗立が教員であった時代の西宗である。西宗は明治23年に廃止となり存続したのは約10年間であったが、当時は卒業後図画教師の需要があったことから人気の学科で、宗立のもとには多くの学生が学んだ。西宗の定義は「畧画油絵水画鉛筆画等」で修学期間は3年間であり、1期から6期までの課程が設けられた。角井は明治21年2月に画学校を卒業しているが入学年は不明である^(註3)。しかし課程通りであったとすれば入学は明治18（1885）年頃であり、規定に即していれば入学時の年齢は14歳以上であった。角井の生年ははっきりしないが、本件および後に挙げる写真の風貌から推測するに、明治3（1870）年から年代が上るとしても5～6年以内の慶応年間頃の生まれであったと考えられる。明治18年の画学校は6月に校舎が河原町の元勸業場跡に移転しており、西宗では前年に最初の卒業生である原撫松と森屋熊夫、次いで本年に田中九衛の3名を輩出している。角井は最初期の卒業生を送り出して間もない時期の西宗に入学し、明治18年頃から21年にかけて伊藤快彦や矢野倫真、森三美らと共に机を並べた世代であった。

画学校の生徒は学内で開催される展覧会のみならず、京都博覧会など在校中から学外で作品を発表する機会が何度か設けられていた。角井の名もそうした課外活動の場において2件確認出来、そのいずれもが孝明天皇二十年祭にあたる明治20（1887）年に、明治天皇の行幸啓に合わせて行われた催しであった。当時京都府知事であった北垣国道は、天皇に献上する目的で進行中であった琵琶湖疏水工事の写生を田村宗立に命じている。明治19（1886）年12月28日付の『日出新聞』には以下のように記載されている。

●疏水工事場の写景

来年一月京都市幸啓の際京都府知事には琵琶湖疏水工事場の現景を詳細に写し 天覧に供せんと京都画学校西宗教諭田村宗立氏に命ぜられしを以て氏は平清水亮夫^{マツ}郎。大八木弊三郎。松田厚吉 山崎兎毛^{マツ}吉。矢野倫直^{マツ}。伊藤快彦。白石樑次郎。山田樑之助 宮宇地玄治。水野久吉の優等生徒十名を引連れ去る廿四日現工事場へ出張し写景に着手したりと云ふ^(註4)

琵琶湖から水を運び京都に新たな水力と水運をもたらした琵琶湖疏水は、第3代京都府知事の北垣国道による一大事業であった。進行中であった疏水工事の写生を依頼された宗立は、西宗の優秀な学生10人とともに任にあたった。角井の名もそこに挙がっているが、記事では「角井厚吉」ではなく「松田厚吉」と記載されている。そもそもこの新聞記事には人名の誤りが多く、平清水亮太郎、山崎兎茂吉、矢野倫真の名が間違っている。だが「松田」は他の記録と照らし合わせるに誤りではなく、明治20年の時点で角井は松田姓であった。

同新聞の明治20年2月16日付の記事では疏水工事の写生図について次のように報じている。

●疏水工事の写生図

京都府画学校の教員及び高級生徒が生写せし琵琶湖疏水線路^{トンネル}隧道^{シヤフト}及井状坑等の図を 天覧に供する由は曾て報ぜしが右は曩に京都府庁へ 御立寄在らせられし際 天覧に供せしま、宮内省へ納められしを以て今度右と同様の図を製し該校へ備へおかんと目今製図中なりといふ^(註5)

完成した疏水工事の写生図は京都府庁で天皇が天覧した後宮内省に納められ、さらに画学校で保管する目的で同じ図を製作中であるという。この時献上された写生図は現在3巻の巻物の状態で《琵琶湖疏水工事之図》の資料名で宮内庁書陵部が所蔵しており、また画学校保管用に製作されたと思われる図は現在琵琶湖疏水記念館が《琵琶湖疏水工事絵図》として39図を額装した状態で所蔵している^(註6)。どちらも鉛筆と水彩が用いられ、作図には細かな違いが認められる。琵琶湖疏水記念館所蔵の図は全て田村宗立作とされるが、宮内庁書陵部所蔵の図は西宗の学生10人が数点ずつ分担して描き上げている。書陵部が所蔵する《琵琶湖疏水工事之図》献上時に制作されたと思われる目録によれば、角井（松田）が手掛けたのは第一巻「第七図 第一井状坑工場外面全景図」（**図2**）「第十四図 同上（第一井状坑）縦断東側内部ノ図」、第二巻「第十五図 工所用雑器ノ図」の3図である（括弧内は稿者註）。全



図2 角井厚吉「第七図 第一井状坑工場外面全景図」《琵琶湖疏水工事之図》1886—87年、宮内庁書陵部蔵

図のなかでも特に目を引く47メートルの深さのある第一堅坑の断面図も角井の作図であったことが分かる。京都の近代化を天皇にアピールするため描かれた本作は、西宗の生徒複数名による現存作としては唯一のものであり、角井が描いた現存する最も古い作例である。

明治20年1月30日に明治天皇、皇后、英照皇太后は泉涌寺の後月輪東山陵で孝明天皇の二十年祭を執り行い、京都府はこの臨幸に合わせて同年2月1日から23日まで御苑内の博覧会館で京都新古美術会を開催し

た。古物と同時代の美術工芸品を展示したこの催しには画学校の教員生徒も多数出品しており、角井もそのひとりであった。『京都新古美術会品目 附記事』に記録のある西洋画の出品者は以下の通りである^(註7)。

鉛筆画

田村宗立 岡唯一 矢野倫真 梶山登美 長谷川富次郎 山崎兎茂吉 安藤正次郎 土肥房吉 水野久吉 栗田豊作 宮宇地玄治 米山精一 井上重吉 川北彦三郎 足立禎造 松本秀吉 莊原彝太郎 大八木一郎 松村徳次郎 安達富士太郎 江阪篤太郎 吉益鉄而五郎 田部英嘉

灰筆画

松田原吉

擦筆画

伊藤快彦 松田原吉 大八木繁次郎

油絵

田村宗立 田中九衛 疋田敬蔵 西廸吉

経歴不明の人物も数名いるが多くが西宗の学生と教員、出仕、卒業生で、角井は松田姓で灰筆画《獵夫并下婢図》と擦筆画《兒童朝拝図》を出品している。なお「原吉」は「厚吉」の誤りである。「灰筆画」はおそらく木炭画だと思われる。油絵の出品者は西宗教員の田村宗立と出仕の疋田敬蔵、卒業生の田中九衛とこの年の3月に卒業する西廸吉の4名で皆一定の技量がある者と判断できるが、灰筆画と擦筆画の出品者もまた《琵琶湖疏水工事之図》に参加した3名であり、西宗のなかでも優れた学生が選出されている。角井は京都府画学校西宗時代に着実に画力を身に付け、在学時代からその実力を発揮した有望な画学生であった様子が窺われる。

図画教師時代

西宗の卒業生は先述した通り地元などの図画教師になる者が多く、角井も明治21年2月に卒業し3月に和歌山中学に赴任した^(註8)。おそらくこの赴任前後で角井姓が変わったと思われる。西宗に通った学生に関する資料として、『京都洋画のあけぼの』展図録では田村宗立自筆の宗立のもとに学んだ人員の一覧「旧画学校生員 人名簿」を紹介しており、そこで「記伊国和歌山市金龍寺町佐伯迅次□方 角井厚吉」と角井の住所と氏名の記載が確認できる（図録の翻刻では解読不能箇所□は注記で（郎カ）とある）^(註9)。この名簿がいつ頃作成されたかは不明だが、角井の住所が和歌山市であることから和歌山中学在任期間に記された可能性は高い。元々の出身地が和歌山であった可能性もあるが、名簿の住所は和歌山中学から近距離かつ下宿先と思われるし、角井が和歌山に在住したのは教員時代の数年間であったように見受けられる。角井のこの地での在任期間は3年足らずであり、明治23年末頃には上京し小山正太郎の画塾不同舎に入門することとなる。

不同舎入門

不同舎は小山正太郎が開塾した、明治期に洋画家が主宰した最大規模の画塾である。角井は一度就職したもののさらに絵を学びたい希望があったと思われ、東京に転居しここで修業を重ねている。京都府画学校西宗の卒業生ま

たは中退者が不同舎に入門した例は角井だけでなく、角井の入門以前にも並木真都男、水野正英、伊藤快彦が学んだ。水野と伊藤は明治21年に原田直次郎の画塾に移ったため角井と時期は重なっていないが、並木とは2、3ヶ月重なっていた可能性がある。並木は明治19年7月に西宗を卒業して間もなく不同舎に入り、明治24（1891）年3月に角井の後任として和歌山中学に着任している^(註10)。こうした入れ替わりのような経歴から、角井の不同舎入門には並木の仲介があったとも考えられる。

小山正太郎は明治23年に高等師範学校を辞職しており、角井の入門は小山が不同舎での指導に一層力を入れはじめた時期に重なっていた。小山の事績や門生による回想をまとめた『小山正太郎先生』には明治25、6年頃の不同舎塾生の集合写真が掲載され、小山や佐久間文吾、石川寅治、満谷国四郎、河合新蔵、鹿子木孟郎、長尾空太郎らとともに角井の姿が写っている。明治24年7月に入門した石川寅治の回想によれば、この頃の不同舎は日毎に隆盛に向かい、毎日の通学生が7、80人にのぼっていたという^(註11)。不同舎での角井は画学校西宗の頃と同様に熱心で優秀であった様子が窺われる。たとえば明治25（1892）年1月1日から4月7日までの塾内の様子を門生たちが記した『不同舎日記』には、角井の名が頻繁に登場する^(註12)。日記は牧野克次や石川寅治、二神純孝（下村為山）らと角井が小山の年賀状百枚を作成したり、新年会の準備を手伝う年始に始まり、日常的な塾内での生活が書き綴られている。「擦筆ヲナスリ終テ午後一時半帰ル」「朝ヨリ登舎コンテ画ヲ描ク」などの習学から「昼ヨリ引続テ談話ヲ為シ八時頃帰ル」「雪達磨ヲ作り昼飯後総出ニテ雪投ヲ演ジ各愉快ヲ極ム」といった和やかな日常も垣間見える。1月22日には角井がかつて教えを受けた田村宗立が来訪している。またこの頃から角井は塾内の事務的な仕事を引き受けていたようである。

既に西洋画の習学と図画教師の経験のあった角井は、入門から半年弱で明治24年5月に開催された明治美術会第3回春季展覧会に油彩画《杜鵑自由自在ニ聞ク里》を出品した^(註13)。なお同展には不同舎から三輪大次郎、佐久間文吾、岡精一、二神純孝も出品している。さらに角井は、翌年明治25年12月に成美堂から尋常高等小学校の図画教科書『小学新習画帖 生徒用』全8冊（**図3**）と、明治27年（1894）3月に『小学新習画帖 教師用』全3冊を出版した。本書は生徒用、教師用とも著者に「小山正太郎 角井厚吉著」と記載があることから、本来は小山が手掛ける仕事であったものとも考えられる。現に小山は同じ成美堂で明治27（1894）年から30（1897）年にかけて中等教育向けの『中等画学臨本』全6篇を刊行しており、『小山正太郎先生』年譜によれば明治26（1893）年から制作に着手し石板に直接描いて版を作っている。『小学新習画帖 生徒用』も少なくとも7、8巻は『中等画学臨本』と同様に石版印刷であり、画学校西宗で石版画を学んでいたはずの角井も同じように製版まで手掛けていたとしても

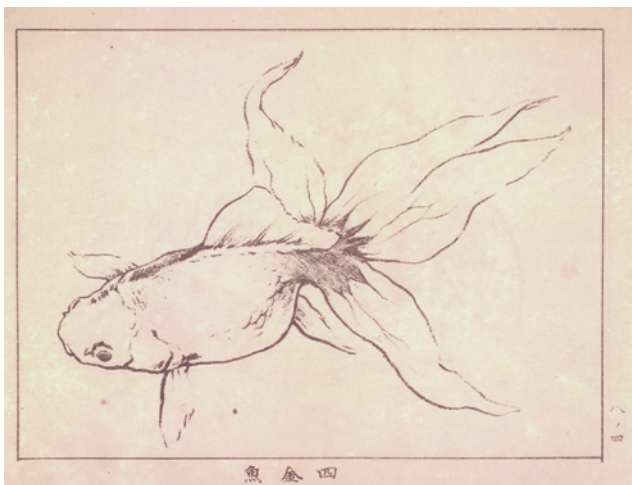


図3 「四金魚」小山正太郎 角井厚吉著『小学新習画帖 生徒用』8巻、成美堂、1892年、東京学芸大学附属図書館蔵

不思議ではない。『小学新習画帖』の出版は入門の段階で一定の水準にあった角井に小山が仕事を分担したか、自らが希望して実現したものと思われる。『小学新習画帖 生徒用』の中身については明治期の図画教科書について体系的に論じた金子一夫の研究^(註14)と本誌前号の玉井・小林論文に言及がある。『教師用』は授業の進め方や順序について懇切丁寧に記述したもので、臨画、写生画、復画、工夫画、聴画、幾何画を学年ごとに難易度を合わせて授業するための手引きとなっている。『生徒用』は上記の課程のうち臨画のための教科書で、直線・曲線に始まり図形や輪郭画から陰影表現を用いた日用品、動植物、

人物、風景画などの手本となっている。本書は図画教科書の定型に則っていたり先行書からの引用はあるものの、角井のこれまでの経歴と、何より図画教育に情熱を注いだ小山の方法論を十分に受け継いだ成果が現れている。また生徒用、教師用とも奥付には上記の3冊とも角井の住所に「東京市本郷区神明町六番地」とあり、角井が当時団子坂にあった不同舎から徒歩圏内の距離に居住していたことが分かる。

門生との交流はその後も続き、『美術新報』第9巻第7号には明治32（1899）年の正月に撮影された角井、河合、長尾、吉田博、満谷、石川の集合写真が掲載されている（図4）。また満谷や石川は不同舎で絵の指導を担当することもあったが、明治34（1901）年に入門した寺松国太郎によれば角井はこの頃会計幹事を務めていたという^(註15)。さらに石井柏亭によれば、明治37年（1904）に弟の石井鶴三を不同舎に入門させるため小山を訪ねたところ、「入舎のことは角井に任せてあるから」と言われ、当時千駄木に住む角井の元で手続きをしている。角井にとって不同舎に身を置いた時間はその後の活動の基盤を形成したと思われる^(註16)。それは画力においてのみならず、塾の運営に携わり住居も上京から晩年の昭和初期に至るまで不同舎に近い文京区駒込付近であり、同門の画家たちとの交流も継続するなど生活全般におよぶものであった。



図4 「現今の大家（6）満谷国四郎氏」『美術新報』第9巻第7号、1910年5月、2頁

船津輪助との出会い

角井と船津輪助との出会いも本郷の地においてであった。船津輪助は日光御成街道の宿場町にあった鳩ヶ谷宿本陣船戸家の分家の生まれであり、明治11（1878）年に東京府南足立郡江北村沼田（現在の足立区江北）に生まれた^(註17)。なお本稿では「船津輪助」に統一するが当時は船津姓であった^(註18)。輪助は江北尋常小学校を卒業した後に駒込蓬萊町にある尋常中学郁文館に学び、明治28（1895）年11月1日に東京専門学校文学科（現在の早稲田大学）に入学した。郁文館在学中は寄宿舎に住んでいたと思われるが、東京専門学校在学中は母方の従兄弟にあたる斎藤阿具の住んでいた不同舎に近い文京区千駄木に寄宿した時期があったという^(註19)。角井と出会ったのは輪助が郁文館に在学していた明治27年、輪助が数え17歳の頃であったと思われる。この出会いがきっかけとなり、角井は輪助の祖父母である船戸徳助とちょうの肖像画2点を制作することとなる（図5）。制作の時期や経緯については輪助の遺品である自筆原稿「松亭草稿 船戸徳助翁詳傳」に次のような記述がある。なお松亭は輪助の筆名である。

静作 翁ガ業績ヲ子孫ニ遺サント欲シ曾テ翁ガ像ヲ画カントスルノ議アリ因テ明治廿七年十二月廿四日翁ヲ己ガ家ニ招キ洋画家角井厚吉ヲシテ画カシム後二旬ニシテ画成ル時ニ翁年七十有八 嫗ノ像モ亦同ジク成ル 老嫗ノ写真ハ十一年五月廿三日写 五十八

「静作」とは輪助の父の船津静作である。船戸徳助とちょうの次男として北足立郡里村（現在の川口市里）に生まれた静作は、同じ船戸家の分家であった南足立郡江北村の船津家に入り跡継ぎとなった。徳助の肖像画制作は元々静作の考えであったようだが、制作にあたって徳助の経歴をまとめたのは当時数え18歳の輪助であった。角井がその役に選任されたのも不同舎からおよそ500メートルの距離にあった郁文館に輪助が通っていたことに関係していたと思われる。角井と輪助がどのように知り合ったかは定かでないが、輪助が近所に洋画塾不同舎のあることを知



図5 角井厚吉《船戸徳助像》、油彩・キャンバス、1894—95年、約45.0×33.0cm、個人蔵

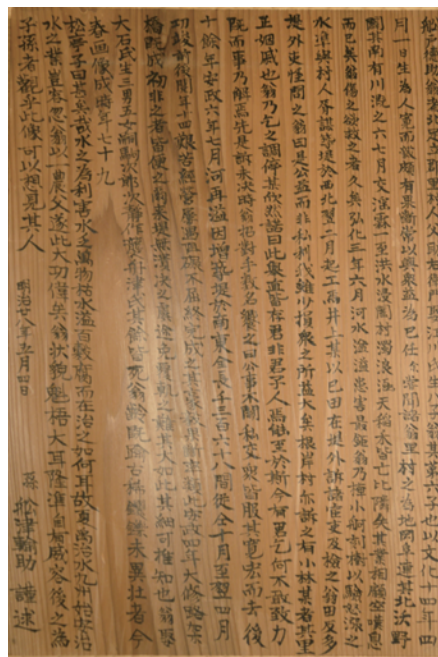


図6 角井厚吉《船戸徳助像》付属板、船津輸助筆、1895年、個人蔵

り静作に伝えたかも知れないし、明治26年から27年にかけて長尾奎太郎が郁文館で図画教師をしていたから長尾の紹介であったかも知れない。江北の船津家に招かれた角井は明治27年12月24日から翌年1月半ば頃にかけて徳助とちょうの肖像画を仕上げている。徳助は当時79歳であった本人を前にしているが、故人であるちょうは明治11年58歳の時に撮影した写真をもとに描いたという。本作は現在制作年の判明している数少ない角井の油彩画の最も古い作例である。2点の作品には以前の額縁の裏板が現存しており、輸助が明治28年5月にそれぞれ徳助とちょうの履歴をそこに書き記している（図6）。北足立郡里村船戸家の当主であった徳助が文化14年（1817）に生まれ、弘化4年（1847）に里村を洪水の被害から守るため川（芝川か）の築堤を行い、安政6年（1859）にさらに増築し全長約2.5kmの堤防を作り上げた功績がその主な内容である。徳助翁の事績を子孫に遺さんとする当初の目的に叶うかたちで本作は受け継がれ現在に伝わっている。

船戸徳助・ちょうの像は細やかな筆致で老年の相貌を迫真的に描いた力作だが、肖像画を描き慣れている印象は無いし、「角井厚吉 画」と楷書で書かれたサインは画家というより画学生に近い姿を思わせる。しかし角井はその後、明治30年代にかけて多くの肖像画を手掛けはじめたようである。たとえば絵画修復工房 YeY では修復作品の紹介として、角井が明治29（1896）年1月に制作した3人の肖像画をホームページに掲載している（註20）。画面右下にはローマ字のサインらしきものが見える。所蔵者は船戸徳助・ちょう像と同様にモデルの遺族である。また明治36（1903）年11月1日発行の『文藝界』第2巻第5号には、その年の9月に亡くなった9代目市川團十郎の追悼として角井が描いた團十郎の肖像画が図絵に掲載されている（図7）。この



図7 角井厚吉《故市川團十郎肖像》、単色石版、『文藝界』第2巻第5号、1903年11月

予告が前号にあり、角井の口絵について「口絵には肖像画の名手を以てゆるさるゝ角井厚吉氏が靈腕に描かれたる故市川團十郎丈が最近の影像を額面用の鮮明高雅なる精巧石版に附して弘く哀悼の紀念となすべし」と報じている^(註21)。雑誌の次号告知という性格上多少の誇張の可能性は考慮すべきだが、角井は「肖像画の名手」と銘打たれており少なからず肖像画家として需要のある存在となっていたようだ。《故市川團十郎肖像》には「K.TSUNOI」とローマ字のサインが入っている。船津家での制作の経験を活かすことで、角井は肖像画家としての顔を持つに至ったと考えられるかも知れない。

《早川秋の夕》をめぐって

前景の河原から中景の川にかかる橋や人物や稲田、後景の山脈へとゆるやかに景色が展開する《早川秋の夕》の落ち着いた構図は、明治20～30年代に描かれた印象を受ける。加えて本作には「東都 角井厚吉 画」と楷書の署名が入っていることから、《船戸徳助像》《船戸ちょう像》と同じく特定の



図8 角井厚吉《早川秋の夕》部分

サインらしきものがなかった明治24～28年頃に描かれたとさらに推測することができる(図8)。また「東都」とあることから上京して間もない時期であったと考えられ、船戸徳助・ちょうを描いた明治27年末よりさらに前の可能性もある。なおこのサインのように「厚吉」ではなく「厚吉」と記す場合もあった。

描かれた場所については本誌前号の玉井・小林論文で検証がなされ、小田原市入生田付近から箱根方面を眺めた、左手に早川が流れ中央右奥に稲田が広がり、右手に二子山の聳える秋の夕刻の景色であることが判明している^(註22)。玉井によれば中央奥に描かれた富士山は本来見える位置に無く、角井の創作であるようだ。中央には小さく薪を背負い帰路につく人物が描かれ、明治20年代に流行した農夫帰路の画題を連想させるが、景色が主役であるこの作品は何よりも不同舎の恒例行事であった写生旅行の経験が活かされている。不同舎の門生の多くが画塾の思い出として写生旅行をあげており、石川寅治によればこの旅行は春と秋に一週間程かけて決行され毎回30人位を小山が引率したという^(註23)。《早川秋の夕》は自ら足を運び絵になる景色を探す不同舎の、あるいは十一会研究所さらにはフォンタネージの教えを受け継いだ作例として位置づけられるだろう。

この作品が早稲田大学の所蔵となった経緯として考え得るのは、船津家が関与している可能性である。現に角井は後述するように船津家と大正期まで交流が続いていたし、輪助本人だけでなく令息にあたる船津富彦は早稲田大学を卒業した中国文学者で、令孫の小川博は早稲田大学を卒業し同大学文学部講師となった文化人類学者である。小川や輪助の令息の船津喜助によって輪助の資料は調査されており、輪助が北京滞在時に父と岳父に送った手紙は船津喜助編・小川博注『燕京通信—船津輪助の北京の通信 明治三十五年～三十六年』として昭和53(1978)年に私家版で書籍化されている。またそれ以前の昭和45(1970)年には『燕京通信』の原文がコピーされており、一部が早稲田大学中央図書館に所蔵されている。本書はおそらく輪助の手紙が発見された当初、船津喜助が散逸を懸念して10部ほどコピーしたといううちの一部である。《早川秋の夕》も船津家の資料調査の過程で発掘され、早稲田大学の所蔵となった可能性が考えられるかも知れない。ただし序文で述べたとおり、《早川秋の夕》が所蔵されたのは昭和42年より前であり、『燕京通信』の関連調査とは時期が異なっている。また修復前は変色など傷みの激しい状態にあり、船津家が所蔵していたと考えるには不自然な点もある。依然として所蔵の経緯は判明しないが、早稲田大学と角井をつなぐ可能性として船津家の存在を挙げておきたい。

地理教科書の挿絵

角井が描いた風景画は油彩作品では《早川秋の夕》が唯一の現存作だが、明治30年代には肖像画だけでなく、学校の地理教科書に掲載する木口木版による風景画の挿絵を大量に手掛けている。木口木版とは年輪の詰まった硬い木の木口面を使った木版画の技法で、凸版でありながら銅版画のような細密な描写で活字と一緒に刷れることから、18世紀末のイギリスにはじまり欧米で流行した複製技術である。日本でこの技術を本格的に普及させたのはフランスで木口木版の修業を積んだ合田清であり、合田が帰国後明治21年に山本芳翠とともに創業した生巧館という工房であった。生巧館およびメディアとしての木口木版の最盛期は明治20年代で、書籍や新聞附録、雑誌、広告や商品パッケージなどその仕事は広範囲におよぶ。明治30年代に入ると写真銅版の発達や多色刷り石版の流行でその需要は減少したが、生巧館は規模を縮小し昭和2、3年頃まで継続した。角井が下図を手掛けていた明治30年代は木口木版の流行が過ぎた時期であったが、初等・中等教育向けの地理や理科の教科書は最盛期を過ぎた後も木口木版の挿絵を比較的長く使用した媒体であった。

木口木版の版下を描いた洋画家は多く、山本芳翠や芳翠が主宰した生巧館絵画部あるいは生巧館の2階を研究所とした白馬会の画家たちに限らず、浅井忠や二世五姓田芳柳などのいわゆる旧派の画家も多かった。なかでも角井と不同舎で共に学んでいた佐久間文吾は明治25年頃から生巧館の下図制作に携わり、生巧館の彫師であった馬淵録太郎によれば佐久間は版下画家としてほとんど専属のように描いていた時期もあったという^(註24)。この他不同舎門生の中村不折や二神純孝も木口木版の版下を手掛けており、角井にとって生巧館や出版社との仕事は自身が下図を担当する以前から身近にあったと思われる。生巧館の業績は長年にわたり多媒体におよぶため全貌の把握が困難だが、近年国文学研究資料館が所蔵する生巧館で保管されていた約6700点の清刷り（印刷前の試刷り）と、稿者も携わったこれに関する共同研究の成果により工房の活動をある程度概観することが可能となった^(註25)。中村茉貴によれば国文研所蔵の清刷り「生巧館木口木版作品群」のうち角井厚吉のサインが確認できるものは7点存在する^(註26)。それらには国内外の景色や風俗が描かれ、サインはK.TSUNOI、BY. K.TSUNOI、BY K.Tの三種類である。工房内で試刷りされたいわば印刷前の仮の図版であるこれらの作品には制作年や掲載媒体の情報が記されていないが、7点のうち5点は次に述べる地理教科書に掲載されていることが判明した。

稿者の調査で角井のサインが挿絵に確認できた教科書を年代順に以下に挙げる。

- ① 山崎直方著『地文学教科書』金港堂、明治31（1898）年12月31日発行
- ② 喜田貞吉・幸田成友著『日本地理』金港堂、明治32（1899）年3月15日発行
- ③ 喜田貞吉・幸田成友著『外国地理 上巻』金港堂、明治32（1899）年4月25日発行
- ④ 高橋兼吉・加藤竜次郎編『普通新地理 日本誌』大倉書店、明治33（1900）年2月16日発行
- ⑤ 幸田成友著『外国中地理』金港堂、明治33（1900）年3月16日発行
- ⑥ 喜田貞吉著『日本中地理』金港堂、明治33（1900）年3月20日発行
- ⑦ 新保磐次著『小学内国地誌 巻一』金港堂、明治33（1900）年10月31日発行
- ⑧ 新保磐次著『小学内国地誌 巻二』金港堂、明治33（1900）年10月31日発行
- ⑨ 新保磐次著『小学外国地誌』金港堂、明治33（1900）年12月28日発行
- ⑩ 棚橋源太郎著『小学理科教科書外篇 児童用』金港堂、明治33（1900）年10月31日発行
- ⑪ 新保磐次著『内国地理小誌』金港堂、明治34（1901）年11月30日発行
- ⑫ 新保磐次著『外国地理小誌』金港堂、明治34（1901）年12月20日発行
- ⑬ 脇水鐵五郎著『地理教科書 巻一』金港堂、明治36（1903）年2月13日発行

- ⑭ 脇水鐵五郎著『地理教科書 卷二』金港堂、明治36（1903）年2月13日発行
- ⑮ 脇水鐵五郎著『地理教科書 卷三』金港堂、明治36（1903）年2月13日発行
- ⑯ 脇水鐵五郎著『地理教科書 卷四』金港堂、明治36（1903）年2月13日発行
- ⑰ 文部省編『小学地理 一』文部省、明治36（1903）年10月10日発行
- ⑱ 文部省編『小学地理 二』文部省、明治36（1903）年10月28日発行
- ⑲ 文部省編『小学地理 三』文部省、明治36（1903）年11月4日発行
- ⑳ 文部省編『小学地理 四』文部省、明治36（1903）年11月24日発行
- ㉑ 脇水鐵五郎著『地理教科書 日本』金港堂、明治36（1903）年12月26日発行
- ㉒ 脇水鐵五郎著『地理教科書 外国一』金港堂、明治36（1903）年12月26日発行
- ㉓ 脇水鐵五郎著『地理教科書 外国三』金港堂、明治36（1903）年12月26日発行
- ㉔ 脇水鐵五郎著『地理教科書 地文』金港堂、明治37（1904）年2月28日発行

生巧館が学校教科書の挿絵を担当したのは明治21年から22年にかけて発行された文部省編纂『高等小学読本』全7巻が最初であり、創業間もない時期に手掛けた生巧館の代表作のひとつである。その後明治23年に文部省編集局が廃止された後も学校教科書の挿絵は生巧館の主要な仕事であり続け、増野恵子によれば民間の出版社が発行する教科書において各社で生巧館製木口木版が掲載されるのは明治20年代半ば以降であった^(註27)。木口木版を採用する教科書や出版社には傾向があり、教科は正確で詳細な表現を重視する地理や理科に多く、出版社は主に金港堂、集英堂（学海指針社）、文学社、富山房などが多用している。

角井のサインが確認できた教科書のほとんどが金港堂の地理教科書であった。大手出版社であった金港堂の主力となったのが教科書事業で、明治20年代より木口木版の挿絵を頻繁に取り入れている。今回調査した限りでは、角井のサインが確認できた最も早い時期の教科書が明治31年末に金港堂で発行された①山崎直方『地文学教科書』である。本書で4点の挿絵を角井が描き、翌年以降も掲載点数を増やし金港堂との仕事を続けている。このうち国文研所蔵の清刷りと一致する図が①新保磐次『内国地理小誌』の「芦ノ湖」「水戸公園」(図9)「舞子浜」、②新保磐次『外国地理小誌』の「砂漠行商」、③脇水鐵五郎『地理教科書 卷一』の「新潟港」の5点である。同じ木口木版でも生巧館以外の工房が手がけている場合があり、たとえば同時期に集英堂が出版した角田政治・矢津昌永編『新編中学地理 日本誌』(明治31年)と『新編中学地理 外国誌 上下巻』(明治32年)には森山天葩のサインや「中山刀」のサインが入る挿絵の版下を佐久間文吾や中村不折が描いている。出版社ごとに起用する彫師工房や下図作者に違いが見られるが、状況や彫りの特徴から判断するに角井が金港堂で手掛けた木口木版の挿絵は全て生巧館製であったと思われる。

以上から角井が明治30年代に集中的に金港堂の仕事を引き受けていた様子が垣間見えるが、同じ出版社で似た内容であるため過去の図版を再掲載している場合も多々見受けられる。特に⑬⑭⑮⑯脇水鐵五郎著『地理教科書 卷一～四』、⑲⑳㉑㉒脇水鐵五郎著『地理教科書 日本、外国一、外国三』㉓脇水鐵五郎著『地理教科書 地文』はほとんどが既出の挿絵で、追加で描き下ろしている可能性はあるが大半が過去作である。角井の金港堂製教科書の実質的な仕事は主に明治31～34年頃であったと考えられる。ただし、角井の挿絵を最も多く掲載した教科書は金港堂の出版ではなく、大倉書店が明治33年に発行した④高橋兼吉・加藤竜次郎編『普通新地理 日本誌』(図10、11)であった。中等教育向けに編纂された本書には日本の名所や都市・産業を描いた38図の木口木版による挿絵が掲載され、そのうち36図に角井のサインが記されている。木口木版の挿絵は板目木版と混在するかたちで一冊に収められる場合が多く、木口木版のみが掲載された場合も画家や彫師のサインの無い図版が過半数であるのが一般的である。



図9 角井厚吉作画《水戸公園》「生巧館木口木版作品群」資料番号3007、国文学研究資料館蔵（新保磐次著『内国地理小誌』金港堂、1901年掲載）



図10 角井厚吉作画《犬吠岬》高橋兼吉・加藤竜次郎編『普通新地理 日本誌』大倉書店、1900年、滋賀大学附属図書館教育学部分館蔵

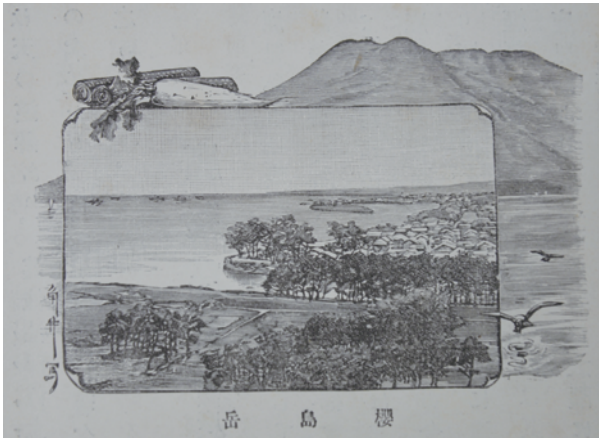


図11 角井厚吉作画《桜島岳》高橋兼吉・加藤竜次郎編『普通新地理 日本誌』大倉書店、1900年、滋賀大学附属図書館教育学部分館蔵



図12 不同舎作画、生巧館刻《第十七課 山》「生巧館木口木版作品群」資料番号0602、国文学研究資料館蔵（学海指針社編『帝国読本』卷之二、集英堂、1892年掲載）

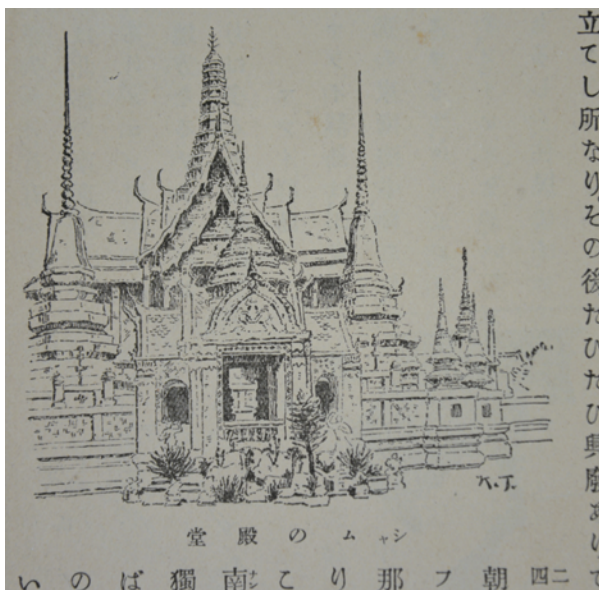


図13 角井厚吉作画《シヤムの殿堂》文部省編『小学地理 三』文部省、1903年、滋賀大学附属図書館教育学部分館蔵

挿絵の全てが木口木版であり、その大半に同じ画家のサインが記された本書のような書籍は稀な例といえる。

これらのモノクロで小画面の風景画とも呼ぶべき角井の挿絵には稚拙さや不自然さが無く、また特に④高橋兼吉・加藤竜次郎編『普通新地理 日本誌』に見られる縁取りなどに施された種々のデザインやレイアウトは巧みであり、西洋画の技術のみならず挿絵制作に手慣れた印象を受ける。角井は自身のサインを加える前から、不同舎が受注していた木口木版の版下の仕事を担当していた可能性が充分考えられるだろう。明治32年に不同舎に入門した小杉未醒（放菴）は当時を回想して、門生が行った生活のための様々な仕事のひとつに木口木版の版下制作を挙げており、「教科書の挿絵になる木口木版の下絵は、精緻を要し肩の張る仕事であったが、是など内職として上の部」と述べている^(註28)。現に明治25年に集英堂が発行した『帝国読本』全8巻には、「不同舎」とサインの入った挿絵が6点確認できる（図12）。「不同舎」のサインは今のところ他に確認できないので無記名で提出する場合の方が多かったと思われる。こうした個人名の出ない下図を角井も明治20年代に手掛け作画スタイルを習熟させる期間があったと思われ、個人で仕事を受ける時代につながったと考えても不自然ではないだろう。

明治35年末に教科書出版社と府県の教育関係者との間で贈収賄が発覚した。政府は明治36年4月に小学校令を改正し、翌年4月から小学校で使用する教科書は文部省製のみとする国定教科書制度を実施することとなる。事件の渦中にあった金港堂は教科書の被採択権を剥奪され、金港堂の教科書での角井の仕事は見られなくなる。しかし角井は国定教科書の編纂にも早速関与しており、明治36年10・11月に文部省が編纂した⑰⑱⑲⑳『小学地理一～四』の挿絵を多数手掛けている（図13）。本書の挿絵には木口木版に特有の細かい線条による陰影表現が見られず、板目木版で製版された可能性がある。角井が文部省の教科書に起用されたのは、上記の金港堂で挿絵を手掛けた②『日本地理』③『外国地理 上巻』⑥『日本中地理』の著者でもあった喜田貞吉が文部省で国定教科書の歴史と地理を担当していた関係であると思われる。喜田は当時について、「教科書事件の結果として、明治三十六年一月いよへ国定教科書の方針を立て、年内に編纂を終つて、明年四月から全国一斉に之を使用せしめようといふ、丸で足許から鳥が立つ騒ぎだ。（略）さし当り入用な小学日本歴史が五冊、小学地理が四冊、合せて九冊を年内に完成すれば



図14 「大正2年4月23日写真」藤田景雲撮影、個人蔵

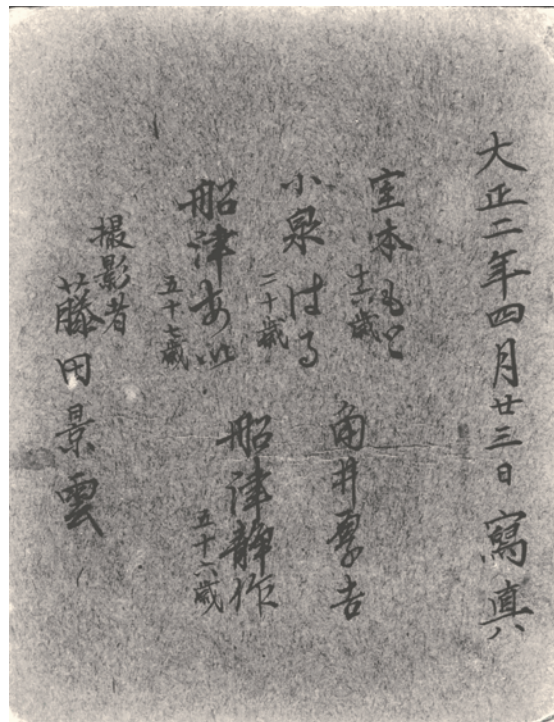


図15 図14裏面

良いのだと、至つて手軽に引受けて見た所が、さて着手して見るとなか／＼さう簡単には行かぬ。(略) 不完全ながらもかくも九冊の教科書が、予定の期日に間に合ふ事が出来てホツとした。」^(註29)と述べており、「小学地理が四冊」にあたるのが上述の『小学地理一〜四』だろう。また現在徳島大学附属図書館が所蔵する喜田貞吉関係資料には、大正11年(1922)に角井が喜田に宛てた年賀状があり、角井が挿絵の仕事を通じて生巧館や出版社のみならず著者とも交流していたことが窺える。

角井が不同舎の門生であった時期が正確に何時頃迄であったかは定かでない。画家として自立していたと思しき明治30年代半ば頃も画塾の運営に重要な役割を担っていたようだし、足立区立郷土博物館が所蔵する角井が船津輪助に送った年賀状を見ると、昭和4(1929)年と6(1931)年の角井の住所は「本郷区東片町125」、昭和8(1933)年と10(1935)年は「東京市本郷区駒込林町182番地」であり、小山の没後も晩年に至るまで不同舎のあった団子坂や追分町に近い位置に居住していた。石井柏亭は鶴三が不同舎に入門した明治37年当時の角井について、「角井という人は不同舎の社中であつたが、もう普通の画は殆ど描かずに、専ら版下などの仕事をして生活していたらしい」とも述べている^(註30)。上京以来角井は大きく環境を変えることなく駒込や本郷付近に住み続けており、肖像画や挿絵など地道に画業で身を立てていた様子を窺い知ることができる。

『江北桜譜』の制作

角井の後半生において深い関係にあったのが船津輪助の父親の船津静作である。「江北の五色桜」編集委員会編『江北の五色桜—船津資料からみる日米桜友好100周年』によれば、角井は船戸徳助・ちょう像を描いた後も船津家と交流を続けていたようで、後に静作の肖像画も手掛けている^(註31)。この肖像画の制作年は定かでないが、船津家が所蔵していた資料に明治38(1905)年12月4日に角井を撮影した写真があることから、近い時期の可能性が考えられる。船津静作は明治19年に江北村長の清水謙吾を中心とする荒川堤に里桜を植栽する事業に協力し、桜並木が完成した後はその管理を任されることとなる^(註32)。名木として伝わる多数の里桜を植栽した荒川堤は桜の名所となり、静作は以後桜の研究と管理育成に長きにわたって尽力した。明治45(1912)年に東京市が日米友好の証としてワシントンに桜の苗木を贈る際には静作が選定を行い、現在もポトマック河畔の桜並木として伝わっている。

江北の桜の姿を後世に残すため、静作は大正2年に角井に依頼して桜譜の制作を開始した。船津家にはその制作開始時期と思われる大正2年4月に静作と角井、船津の親族を写した写真が残っている(図14、15)。角井は江北の船津家に滞在し大正8年まで7年をかけて水彩画による57枚の桜の花を描いた。本作は大正10(1921)年に折帖に装丁され、三好の序文と洪沢栄一の題字「江北桜譜」が寄せられ図譜の完成に至った(図16)。三好の序文の内容は『江北桜譜』の紹介を兼ねて桜の会が発行する年刊誌『桜』第4号(大正10年)に掲載されているし、翌年には船津邸で桜の会が主催する「荒川観桜談話会」が開かれ、本作が披露されている^(註33)。また大正7(1918)年4月にはアメリカの植物学者ウォルター・テニソン・スウィングルが船津邸を訪ね制作中であつた桜の写生図を目にしており、ワシントンに贈った桜の11品種の制作を新たに静作に依頼している。このため角井は『江北桜譜』にも収められ

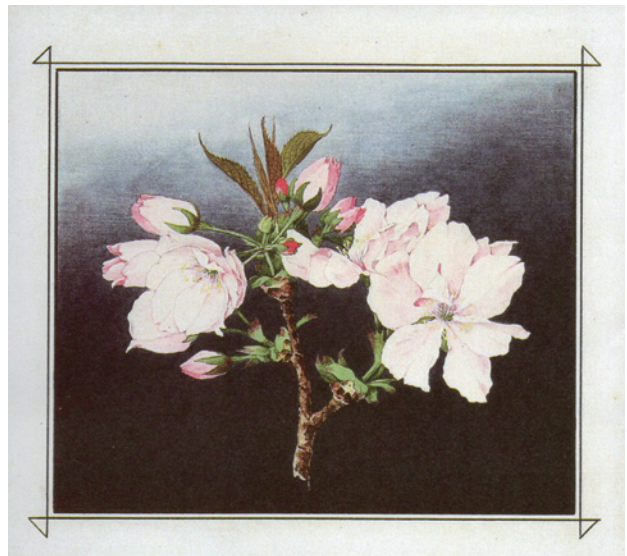


図16 角井厚吉「有明」『江北桜譜』1913—1919年

ている11種の桜を新たに描き、大正10年にスウィングルに寄贈した^(註34)。この11点の桜図は現在米国議会図書館が所蔵している。細やかで美しい仕上がりのこの桜譜は船津邸でお披露目される機会があったし、三好やスウィングルなどの専門家に評価され、新たに描いた桜図は海を渡った。しかし『江北桜譜』は基本的に船津家に秘蔵された図譜で人目に触れる機会が少なく、たとえば『桜』第9号（昭和2（1927）年）掲載記事では『江北桜譜』について「（静作の）研究の業績は「江北桜譜」に於て発表せられて居るが、未刊書の為めに一般には知られて居ない。」とも述べている^(註35)。現在は写真画像として平成25（2013）年発行の樋口恵一『ワシントン桜のふるさと 荒川の五色桜「江北桜譜」初公開』や平成27（2015）年に前掲した『江北の五色桜 船津資料からみる日米桜友好100周年』が出版されたことで不特定多数が閲覧可能となったし、スウィングルに贈った桜図11点も現在は所蔵館のホームページに画像が掲載され容易に閲覧が可能である。ただしこのような状況は最近の出来事であり、『江北桜譜』は角井の生前あるいは没後長きにわたって公にされることのない作品であった。

結

角井の没年は生年同様に不明だが、前述した船津輪助宛の年賀状のうちの1枚は昭和10年の消印であり、また昭和14年11月15日には東京美術倶楽部にて小杉放菴の出品した展覧会を訪れた記録が残されている^(註36)。この頃まで角井は存命していたし、晩年に至っても画家や船津家（あるいは船津家）との交流をまめに継続している様子が窺える。ただし画学生時代の京都新古美術会や明治美術会以外で、公募展に出品したり美術団体に所属している記録はその半生において確認出来なかった。明治34年に結成された不同舎出身の画家が多い太平洋画会にも角井は特に関係しなかったと思われる。

角井は画壇に所属せず受注で絵を描いており、その作品も個人が所蔵することが多かったようだ。また挿絵の仕事も雑誌の表紙や口絵などの目立つ場所ではなく、地理教科書という年代も使用者も限られる分野においてなされていた。同じ不同舎出身者では佐久間文吾の立場に近かったかも知れないが^(註37)、佐久間のようにどこかの機関に所属した経歴は確認出来ない。角井は画家とも画工とも異なる道を歩んだ描き手であった。不同舎の番頭を務めながらひと目につきにくい仕事で長きにわたって創出した作品群は、本稿で垣間見える以上に膨大であったと思われる。

謝辞

本稿の執筆にあたり伊澤隆男様、金子一夫先生、牧野由理先生、早稲田大学會津八一記念博物館助手の玉井貴子様、早稲田大学図書館の山本さぎり様にご助言とご協力をいただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

註

- (1) 松尾芳樹「画学校出仕について」『京都市立芸術大学芸術資料館年報』18号（京都市立芸術大学芸術資料館、2009年）参照。
- (2) 『百年史 京都市立芸術大学』（京都市立芸術大学、1981年）参照。
- (3) 角井の画学校卒業年については金子一夫『近代日本美術教育の研究—明治時代—』（中央公論美術出版、1992年）を参照した。
- (4) 「疏水工事の写景」『日出新聞』1886年12月28日、2面。
- (5) 「疏水工事の写生図」『京都日出新聞』1887年2月16日、1面。
- (6) 《琵琶湖疏水工事之図》については原田平作「琵琶湖疏水工事図巻と田村宗立」『琵琶湖疏水の100年 画集』（京都市水道局、1990年）を参照した。
- (7) 阿形精一編『京都新古美術会品目 附記事』池田八郎兵衛出版、1887年。なお京都新古美術会については拙稿「明治20年京都新古美術会の開催と画家の動向」『美術運動史研究会ニュース』No.145（美術運動史研究会、2014年）に述べた。

- (8) 前掲3金子一夫『近代日本美術教育の研究—明治時代—』参照。
- (9) 「資料紹介1 明治画学館人名簿」『京都洋画のあけぼの』京都文化博物館、1999年。
- (10) 前掲3金子一夫『近代日本美術教育の研究—明治時代—』参照。
- (11) 石川寅治「恩師小山先生追想」高村真夫編『小山正太郎先生』（不同舎旧友会、1934年）参照。
- (12) 東京文化財研究所所蔵。また翻刻資料として博士論文 山田直子「小山正太郎及び不同舎の研究」（2007年）、176-179頁を参照した。
- (13) 青木茂監修・東京文化財研究所編纂『近代アート・カタログコレクション008 明治美術会』（ゆまに書房、2001年）参照。
- (14) 前掲3金子一夫『近代日本美術教育の研究—明治時代—』、金子一夫「明治初期図画教科書とその原本の研究（4）—カッサーニューの画手本とその引用—」『茨城大学教育学部紀要人文・社会科学, 芸術』36号、1987年。
- (15) 寺松国太郎「恩師小山先生追想」前掲11『小山正太郎先生』参照。
- (16) 石井柏亭『柏亭自伝』中央公論美術出版、1971年、137頁。
- (17) 船津輪助の経歴については小川博「解説 船津輪助のこと」船津喜助編・小川博注『燕京通信 船津輪助の北京通信 明治三十五年～三十六年』（私家版、1978年）、235-274頁を参照した。
- (18) 伊澤隆男「沼田船津家第七代＝船津久五郎（文測）に連なる人々（一）」『足立史談』第577号（足立区教育委員会、2016年3月）、2-3頁参照。輪助が後に跡を継いだ鳩ヶ谷里の分家は「船津」と名乗った。
- (19) 齋藤阿具「二文豪其他の名士と私の家」『文藝春秋』第13年第4号（1935年4月）、136-143頁参照。また船津輪助の学生時代の住居については伊澤隆男氏にご教示いただいた。
- (20) 「油彩画の修復事例 油彩画「3名肖像（仮題）の修復」2023年4月11日「絵画修復工房 YeY」<https://studioyey.jp/news/2334.html>
- (21) 「文藝界第二巻第五号予告!!」『文藝界』第2巻第4号、金港堂、1903年10月。
- (22) 玉井貴子・小林夢実「洋画家・角井厚吉と『早川 秋の夕べ』について」『早稲田大学津八一記念博物館研究紀要』第24号、2023年、3-11頁。
- (23) 前掲11石川寅治「恩師小山先生追想」参照。
- (24) 馬淵録太郎『木口木版伝来と余談』（私家版、1985年）参照。
- (25) 国文学研究資料館特定研究「生巧館制作による木口木版の研究—国文学研究資料館所蔵品を中心に」（2015、2016年度）の成果として人間文化研究機構国文学研究資料館編『木口木版のメディア史—近代日本のヴィジュアルコミュニケーション』（勉誠出版、2018年）を出版した。
- (26) 中村茉貴「〔コラム〕木口木版のサインに関する所見—国文学研究資料館所蔵の生巧館資料群を中心に」前掲23『木口木版のメディア史—近代日本のヴィジュアルコミュニケーション』、191-196頁。「生巧館木口木版作品群」にて角井のサインが確認できるのは資料番号0190、0267、3007、3024、3025、3026、3030の7点である。
- (27) 増野恵子「生巧館の成立とその発展—幕臣ネットワークと学校教科書」前掲23『木口木版のメディア史—近代日本のヴィジュアルコミュニケーション』、110-139頁。
- (28) 小杉放菴「不同舎の人々（二）」『日本美術』第2巻第9号（9、10月合併号）、美之国社、1943年10月、47-49頁。
- (29) 喜田貞吉『六十年の懐古』私家版、1933年、93-94頁。
- (30) 前掲16石井柏亭『柏亭自伝』、137頁。
- (31) 「江北の五色桜」編集委員会編『江北の五色桜—船津資料からみる日米桜友好100周年』（江北村の歴史を伝える会、2015年）、113頁参照。
- (32) 樋口恵一『ワシントン桜のふるさと 荒川の五色桜「江北桜譜」初公開』（一般社団法人東京農業大学出版会、2013年）、伊澤隆男「船津静作翁に連なる人々」『足立史談』第593号（足立区教育委員会、2017年7月）、1-2頁参照。
- (33) 「荒川観桜談話会」『桜』第6号（桜の会、1923年）、60-61頁参照。
- (34) 樋口恵一『ワシントン桜のふるさと 荒川の五色桜「江北桜譜」初公開』（一般社団法人東京農業大学出版会、2013年）、21-23頁参照。
- (35) 相川要一「荒川堤栽桜記念碑の建設に因みて」『桜』第9号、桜の会、1927年、108-115頁。
- (36) 「年譜」小杉放菴記念日光美術館 <https://www.khmoan.jp/khmoan/biography.html> 参照。
- (37) 佐久間文吾の経歴については牧野由理「佐久間文吾と博物図：洋画家、版下画家、そして画工として」『近代画説』27号（明治美術学会、2018年）を参照した。

